

継体天皇の即位について

継体天皇は第26代天皇で507年から531年まで在位した天皇です。前代の武烈天皇に子が無く皇統断絶の危機に際して、越（福井）から迎えられました。ただむかえられたにもかかわらず、高槻あたりの宮でうろうろし、大和に入りません。その時奇妙な行動をとります。既に尾張から迎えた目子姫との間に、後の安閑、宣化両天皇を設け、仁賢天皇の娘手白香皇女も迎え自身の「箔付け」も完了しているにも関わらず、新たな后を7人迎入れます。

これには皇統確保や自身の「箔付け」ではなく別の目的があったと考えられます。この時推挙した人物は大伴金村や物部麿鹿火（あらかひ）でした。この2部族は神武と饒速日の皇統選定時に功績のあった豪族として「書紀」にも記載のある部族でした。しかしヤマトには継体の帝位就任を心よく思わない豪族も多くいたはず。そこに無手活流で入っていくのは危険さわまりないと継体天皇は判断したのでしょう。后よりも北方勢力の団結が肝心とした結果は後の出身が北方勢力ばかりとなります。継体天皇としては後ろ盾を得て一安心というところではなかったでしょうか。

元々継体天皇の招聘の目標は継体だけではありませんでした。最初は丹波の倭彦王のところに行ったところがにぎにぎしく行った軍隊を倭彦王に攻めてこられたと勘違いされて逃亡されて仕方なく継体天皇のところに行ったのです。

一連のできごとは古来からの北方に基盤を置く勢力の存在を感じさせますし、大伴と物部の行動は神武系の皇統断絶危機に対して饒速日の系統をたどったものではないでしょうか。

新たに迎えた後の出身部族

后妃	出身部族	出身地
雅子媛	三尾	越
広媛	坂田	近江
麻積娘子	息長	近江
関媛	茨田	河内
倭媛	三尾	越
はえ媛	和珥	備前
広媛	根	美濃